

好きこそものの上手なれ

赤嶺 淳 一橋大学大学院 社会学研究科教授

2014年4月に着任して10年がすぎた。

思いだされるのは3月31日に降り立った国立駅のホームで目にした満開の桜並木の絢爛さである。その数時間前に新幹線の車中から眺めた富士山も、澄みわたった青空と山頂部に残る雪のコントラストが鮮やかであった。このふたつの記憶は、その後にコロナ禍で合流するまで6年ほどつづいた单身生活を幾度となく励ましてくれた。

想定外の祝福に意気揚々としていた、その日の夜のことだった。豪州の提訴をうけて2010年からハーグ(オランダ)の国際司法裁判所で係争中であった南極海における日本の鯨類捕獲調査(調査捕鯨)について、「国際捕鯨取締条約違反」との判決がくだったのである。

新聞もテレビも「日本、敗訴」の話題でもちきりだったある日、見知らぬ編集者から捕鯨をテーマとする本の執筆依頼が舞いこんできた。10数年におよんだナマコ研究を2010年5月にまとめて以来、捕鯨問題に関心を寄せていたのは事実である。とはいえ、問題の大きさから踏みきれずにいたわたしも、ついに腰をあげざるをえなくなった。

勉強なくして研究はありえない。しかし、両者は異なる行為である。いざ、書こうとすれば、膨大な知識を自分の血肉と化したうえで、「なにかあたらしい」ことを説かねばならないからだ。なにがあたらしいかは勉強しないとわからない。あたらしさは、史実のこともあれば、着眼点のこともある。

2年半の粗くて雑な突貫工事ではあったものの、関係者の支援もあって、2017年2月に『鯨を生きる』を上梓することができた。原稿用紙300枚強という物足りないものであったが、当時の自分の力では、それが精一杯でもあった。

反省点の最たるものは、捕鯨業という近代的産業をあつかいながら、「資本主義」という視点が欠如していたことである。その欠点を自覚させたのは、カリフォルニア大学のアナ・チン(Anna Tsing)さんが2015年9月末に出版した『マツタケ』である。『鯨』の執筆が佳境をむかえていた2016年3月、縁あって同書の翻訳をすることになった。

日本にやってくるマツタケを題材としてグローバリゼーションを論じる彼女の分析のキレの鋭さと奥深さに、脱稿前から自著との質のちがいを痛感させられていた。もっとも世界の人類学研究を牽引するチンさんと比較するなど、おこがましいかぎりである。チンさんをもちだすまでもなく、すべては視野狭

窄かつ貧弱な構想力に起因する。要は勉強不足だったということだ。

失敗の理由は、副題を「鯨人の個人史・鯨食の同時代史」としたように、「鯨食ありき」で執筆を構想してしまったことにある。たしかに当時、捕鯨問題といえば、鯨肉の是非——鯨食の伝統や正統性——をめぐる議論がもっぱらであった。だから、書く以上は硬直した議論に一矢を報いたいと考えていた。その意味では、①欧州でマーガリン原料とされた鯨油をもとめて戦前の南氷洋捕鯨が実施されたことを指摘するとともに、②江戸時代に捕鯨が栄えていた西日本を中心に今日の鯨食文化が継承されているという「鯨食文化の地域性」をあきらかにできたことによって、③「欧米は油だけとって、肉は捨てたけど……」的ないわゆる「捕鯨文化」論にもジャブは打てたと自己評価している。

しかし、1960年代まで欧州各国がマーガリンや固形石鹼、ダイナマイトの原料として渴望していた「世界商品」たる鯨油の重要性については、十分に自覚できていなかった。そのことが資本主義や近代化という社会科学が追究すべき課題に背をむけ、好事家的に捕鯨史を論じてしまった敗因である。

以来、わたしの苦悩はつづいている。それでも、うっすらとではあるが視界はひらけつつある。幸か不幸か2020年初頭にはじまったCovid-19の感染拡大によって、この4年間は「歩きながら考える」研究手法がつかえず、資料を読みこむ生活を余儀なくされた。そのおかげで、第1次世界大戦以降の世界において鯨油やパーム油、やし油(ココナツ油)、大豆油などの食用油脂のあいだで展開されてきた『『油脂間競争の興亡史』の解明』なる着想にいたり、2024年度から5年計画で「プランテーション新世における食の安全保障と人間環境保全——油脂間競争の視点から」という科研費プロジェクト(24H00119)を組織することになった。

現時点では、どのような成果をだせるか、心もとないかぎりである。しかし、コロナが明け、晴れてフィールドワークも可能となったわけだ。アブラヤシの原産地である西アフリカを歩いてみたいし、大豆の原産地とされる旧満洲地域のいまも体感してみたい。フィリピンで「命の木」(tree of life)と呼ばれ、日常生活のあらゆる面で利用されるとともに、一時はマーガリン原料としても重宝されたココヤシはどうなっているのか？

一説によれば、英国でマーガリン需要が爆発したのは、バターとの価格差だけでなく、工場で大量生産された食パンを、家庭に普及した電気トースターでカリカリに焼いて食べるというイングリッシュ・ブレックファーストが確立していったこととも無関係ではないようである。「卵か、鶏か」ではないが、マーガリンを主戦場として展開された油脂間競争をあとづけるには、「食」が工業化されていった過程にも目をくばる必要があるわけだ。

「食パンとマーガリン」をめぐる旅には、どんな出会いが待ちうけているのだろうか。「これを知る者はこれを好む者に如かず。これを好む者はこれを楽しむ者に如かず」(知之者不如好之者、好之者不如樂之者)。孔子の教えを糧として、のこされた現役生活を完走し、つぎの人生を開拓していくためにも、能動的に出会いと思考をかさねる5年間としたい。

「きわ」を歩くこと

小泉 佑介 一橋大学大学院 社会学研究科講師

「きわ」を歩くことは、そんなに簡単なものではないように思う。確立した学問の端に行くのだから、いろんな方面から批判を受けて当然であるし、有意義な結果にたどり着かないまま、無駄足に終わってしまう可能性の方が高い。歴史を遡ってみても、既知の世界のきわ(=新世界)に出かけていった冒険者たちは、いつも常識からはずれた人たちばかりであったし、コロンブスやマゼランのように名声を勝ち得る者はほんの一握りであって、その多くは、何の功績も残せないまま、荒波と極寒によって息絶え、いまでも冷たい海の底で眠っている。我々の「きわ」を歩くという試みは、大航海時代にヨーロッパから北極海を抜けてアメリカ大陸へ渡ろうとした勇敢で「気の狂った」冒険者たちと同じくらい、無謀なものであるように思える。

「きわ」を歩く人のことを冒険者といえれば聞こえはいいが、今風に言えば「迷惑系 Youtuber」の生き方が一番近いのかもしれない。新参者の Youtuber たちもまた、とにかく常識をやぶることに必死であり、その多くは誰の目にもとまらないまま、ときに世間からの冷たい目線に虐げられつつ、静かに消えていく。世界の「きわ」は莫大な富を得る可能性と、誰もそれを予測できない不確実性が混在するフロンティアであり、みな一縷の望みにかけて、無限の砂漠に挑んでいくのである(筆者がフィールドとしているインドネシア・スマトラ島の開拓地=フロンティアを生きる人々にも同様のことが言える)。我々が「きわ」を歩くということは、他者からの評価を得るためではなく、ただただ新しい世界への好奇心に突き動かされ、何も得ることがないまま途方に暮れるといった「無謀な行為の繰り返し」に身を投じることを覚悟しなければならないだろう。

このように考えてみると、世界の「きわ」(=フロンティア)は無法地帯であり、個人の腕力が成功を左右するものと思われてしまうかもしれない。しかし、ことはそう単純でもない。世界の「きわ」に目を向ける人たちは、どの時代においても、書物を通じて各地の歴史や文化を学ぶだけでなく、酒場に出向いて旅人から新鮮な情報を集め、同じ志を持つ友と一緒に小さなアソシエーションを組み、自分たちの世界観に共感してくれるパトロンを見つけるまで、せっせと人的ネットワークの拡大に努めてきた。新時代が開けるときにはいつも、クラブやサロンといった共空間／情報装置がその原動力となっていたわけである(『クラブとサロン——なぜ人びとは集うのか』NTT出版、1991年)。確立した世界ならば、誰でも1人で歩くことができる。しかし、世界の「きわ」を歩くためには、同じ

志を共有する人々との「つながり」なくして不可能であり、コーヒーと酒の刺激が、すべてのスタート地点になる。

本稿の冒頭で「きわを歩くことは難しい」と書いたが、より具体的にいえば「きわを歩く（仲間を集め、同じ目標を共有し、その実現に向けてひたすら歩き続ける）ことは難しい」と言った方が妥当であろう。このKIWA会は2024年にスタートするわけだが、5年、10年経った後で、どのような新世界に到達できるのか、いまは全く見当もつかないし、そもそも明確なゴールさえ定まっていない。しかし、それでもやはり、世界の「きわ」に近づきたいという衝動を抑えられない筆者にとって、KIWA会の愉快的仲間と「無謀な行為の繰り返し」に身を投じてみることは、とてもワクワクするし、これからの研究人生の重要な転換点になるような気がしてならない。

調査地からものごとを考える

松浦 海翔 一橋大学大学院 社会学研究科 博士後期課程 1年

2023年度は、全国ニュースで連日報道がなされるほど、ツキノワグマによる被害が大きく、その規模は過去最大であった。わたしの調査地の集落がある秋田県内だけでも、人身被害の数は70名(2023年11月22日時点)に達し、2,311頭(2024年2月末暫定値)が狩猟、ないし有害駆除によって補殺された。

同時期に「マタギ」と呼ばれる人びとについての調査を実施していたわたしは、緊張感のある生活を送っていた。車を走らせれば、田んぼに落ちた糞を懸命に探すツキノワグマの親子が目に入ったし、集落内を散歩しているときに、クマの糞が道路に落ちているのを見つけたこともあった。こうした状況のなか、宴の最中に食べたクマ鍋の、その変わらぬ美味しさと、このクマを食べるに至るまでの背景とが混じりあった味を、いまでも鮮明に覚えている。

調査地である、秋田県北秋田市に位置する集落の人びとは、2021年の春にはじめて集落を訪ねて以来、かれこれ3年余りの付き合いになる。雪と寒さがまだ残る集落へと足を踏み入れた、右も左も、秋田弁も分からないわたしを、かれらは残雪が溶けるほど暖かく迎えてくださった。月日をへて、いまでは「秋田弁」で会話に参加できるようになったし、山のことや山菜のこと、クマの解体のことも、少しずつではあるがわかってきた。

2023年には、秋田県以外の場所でも調査をおこなった。そこで、さまざまな人と出会い、夜通し酒を飲み交わしながら話をした。調査地の集落の人びとには「酒ばっか呑んで、ほんとに研究しているの?」と、冗談まじりに言われることも多いが、ある意味自分なりの調査スタイルとして、身体化されてきているように感じる。心底、酒好きでよかったと思うばかりである。

修士論文では、かれらとの付き合いのなかで徐々に明らかになっていった、現代の「マタギ」の生活について、多少なりとも記述することができたように思う。学部時代と比べて大きく変わったのは、研究と論文執筆のスタイルである。卒業論文では、興味があり、かつ分析枠組みとして使いたいと思う理論が先行し、その結果、調査地では見たいものしか見られていなかった。いわば、「カッコつけ」すぎていたのである。

修士課程の2年間で、きちんと調査対象について記述すること、そしてそこから研究を立ち上げていくことの重要性を学ぶことができたのは、わたしのなかでの大きな転換点である。一方で、修士論文の審査会では、理論の用い方や分析の仕方(具体と抽象、調査と理論のあいだの往復)について厳しいご講評もいただ

いた。これは、今後の課題として、勉強に励みたい。また、自分自身の研究以外でも、和歌山県太地町でおこなったインタビューと、その成果物の出版に携わらせていただいた。調査から出版までの一連の流れという貴重な経験をすることができたのは、今後の糧になるだろうと考えている。

さらに、2024年度には「阿仁マタギの食物分配における対称性の研究：「マタギ勘定」の倫理と社会秩序の生成」(24KJ1141)という研究題目で、日本学術振興会特別研究員(DC1)に採択された(2024年4月～2027年3月)。「研究者は、なによりも論文を書かなくてはいけない」と、指導教員には常々言われているが、これまでなかなか手を出せずにいた。しかしながら、現在まで数回にわたって実施してきた調査を経て、書きたいと思えるテーマがいくつか生まれつつある。もちろんそのためには、たくさんのことを勉強する必要があるのだが、今後は論文執筆や、学会発表なども積極的におこなっていききたい。

また、秋田県内にある集落の調査だけでなく、海外調査の実施も、このところ、ずっと頭の片隅にある。ここだ、という調査地がまだあるわけではないのだが。

新たに出会うであろう人びとと酒を飲み交わし、話をする日々を想像しながら、フィールドワークと同じように地に足をつけ、這いずり回るようにして、日々の研究に邁進したい。

●2023年度に実施した国内調査

- 秋田県北秋田市(4月3日～7月3日、10月18日～11月17日)：参与観察、インタビュー調査などを実施。クマ猟や山菜採取、有害駆除、クマの解体作業、集落行事などに参加。
- 山形県西置賜郡小国町(5月4日)：小国マタギの方々が主催する、「第41回 熊まつり」への参加。
- 福島県只見町(6月24・25日)：「第34回 ブナ林と狩人の会 マタギサミット in ただみ」への参加。
- 新潟県村上市大毎(11月7日)：村上市で狩猟をおこなう方への聞き取り調査の実施と、山熊田への訪問。

研究への切符

鈴木 佳苗 一橋大学大学院 社会学研究科

一橋の門を叩いてから丸一年が経った。2020年に大学を卒業し、就職してから3年間、研究という営みにチャレンジしたいという気持ちは小さく燃え続けていた。大学生のとき、自分にはできっこないと大学院進学をあきらめた。しかしわたしは幸いなことに、好きな仕事をさせていただきながら研究に挑戦できる切符を得た。これが会社員と大学院生という二足の草鞋を始めるにいたったいきさつである。

大学院の入試に合格してからまもなく、指導教員の赤嶺先生から「太地町プロジェクト」に参加してみないか、と声をかけていただいた。恥ずかしながら、わたしはこれまで捕鯨問題について無知であり、プロジェクトメンバーに迷惑をかけないか不安であった。しかし赤嶺先生やゼミ生とともに、インタビュー調査から生活史の記述をおこなう経験は自身の研究の糧になると考え、参加を決めた。プロジェクトリーダー・辛さんの多大なるサポートのもと、なんとか形にすることができた。論文執筆から数年離れ、引用文献の表記など基本的な原則も忘れてしまっていたわたしとの共同執筆を、嫌な顔一つせず親身に助けてくださった辛さんには、なんと感謝を伝えれば良いかわからない。

大学院での生活がスタートし、まず思い出されるのは講義が非常に刺激的であったことだ。なかでも印象に残っているのは、質的調査の手法をまなぶ講義で出された、特定の他者にインタビュー調査をおこなってレポートを執筆するという課題である。自身の研究とは関係のないテーマで良いと聞いたとき、わたしの頭には真っ先に祖父が浮かんだ。祖父は、戦時中に福島県へ疎開したときの貧しかった生活や、戦後上京してからは地方出身者であることで受けた差別的経験、故郷はいまや親族もほとんど住んでおらず過疎化していることなど、よくわたしに聞かせてくれたためである。祖父のライフ・ヒストリーを追うことは、戦後上京して働いた人々の苦悩や葛藤、また故郷への複雑な思いを浮かび上がらせると考え、テーマを決めた。レポート執筆にあたっては、祖父が生きた地域に関する資料や先行研究にあたりながらインタビュー調査を実施した。国語の高校教員で文章には厳しい祖父にレポートを送るのは正直気が引けたが、「じっくり読んだ。立派になったな」と返事をくれた。大学院への進学を決心したさい、自身に約束した「納得のいく修士論文を書きあげる」という目標に打ちひしがれることもあるが、祖父の言葉が背中を押してくれるおかげで、今日まで続けられているように思う。

今年度提出予定の修士論文は、フィリピン・マニラに居住するイスラム教徒の食に関する研究を構想している。大学在学中、フィリピンの De La Salle 大学へ交換留学したさい、フィリピン南部では歴史的にイスラームが繁栄したことや、1970年代より長期にわたってイスラーム分離独立運動が展開されてきたこと、南部のイスラム教徒居住地域は相対的に貧困であることなどを知った。キリスト教徒である学生たちがこれらの問題について熱心に議論するさまに感銘を受けたことが、本研究を構想した一つのきっかけである。2023年度にはマニラに二度赴き、フィリピン人イスラム教徒の人々が、どのような食事をハラールとみなしているのか、都市生活のなかでラマダンに代表される宗教実践をどのようにおこなっているのか、フィールドワーク調査を実施した。今後は他国のハラールに関する先行研究や、食の観点から社会関係に着目する研究などを丁寧に確認しながら、フィリピンというフィールドだからこそ見出せる視点を模索したい。

研究に挑戦できる切符は、職場の方々、教員の方々やゼミの仲間、調査に協力してくださるの方々、家族など、多くの人の支えによって得ることができた。手にした切符への感謝を忘れずに、いまのわたしのベストを尽くした修士論文を書き上げたい。

参考文献

鈴木佳苗・辛承理, 2023, 「あ〜腹ラーセンや」, 赤嶺淳編, 『クジラのまち 太地を語る——移民、ゴンドウ、南氷洋』, 英明企画編集, 106-127頁。

いいテーマ、いい教師、いい研究仲間

倉金 順子 一橋大学大学院 社会学研究科 博士後期課程 3年

4月という月は新年度が始まる月であると同時に、個人的には誕生日でもあるため、毎年二重の意味で気持ちを新たに迎える月である。つい先日修士論文を提出したばかりの感覚でいたが、今年で博士後期課程3年目。いつまでも立ち止まっている場合ではない。ここ数日は改めて自分の研究テーマ、目的、意義などと向き合いながら過ごしている。

振り返れば大学院への進学を決意したのは、今から5年前の2019年の春、41歳になる頃だった。大学卒業後はメーカー、広告代理店、外食チェーンと勤務先を転々としながらもマーケティング職に従事していた。38歳で退職し、夫が勤務するハンガリーの首都ブダペストに居を移してからは、ハンガリー語を学ぶ傍らで現地の人々に日本語や日本の家庭料理を教える活動などに取り組んでいた。そんな中で夫の東京転勤が決まり、さて自分は何をして過ごそうと、一瞬以前の職場に戻ることも脳裏をよぎったりもしたが、結局大学院進学を選んだ。その理由は大きく二つある。

一つには、ブダペスト在住中に現在の指導教員である秋山晋吾先生をはじめ、ハンガリー史および中東欧史を専門とする多くの研究者の方々（それも当該分野における第一人者の方々ばかり）と出会い、造詣の深さと研究に対する真摯な姿勢とに感銘と刺激を受けたことにある。在住者としてハンガリーという国をよく理解しているつもりになっていたが、研究者の方々との交流の中で、実際は表面的なものしか見えていなかったことに気付かされたのだ。いつしか自分もハンガリー史の専門家になって共に深い議論をしていきたいと、漠然とした憧れを抱くようになった。

では、ハンガリー史の中で何のテーマを研究するのか。その問いに対する答えでもあるのだが、大学院進学を決めた二つ目の理由はハンガリーの料理や食文化をより深く知りたくなったからである。当初は単純にその成り立ちについての興味だけであったが、「ハンガリーを代表する文化財」と認証されている料理や食品もあると知り、「食」が文化財として認証されることによる意義を追究したくなった。また、今から約100年前の1920年、第一次世界大戦の講和条約であるトリアノン条約によって領土の約3分の2が近隣の新興国家群に組み込まれるまでは、ハンガリーの領土はカルパチア盆地のほぼ全域に跨って広がっていた。周辺諸国内のかつてハンガリー領であった地域（例えばスロヴァキアやルーマニア、セルビアなど）には現在もハンガリー系住民が少なからず居

住しており、私自身も旅行などで訪れると、随所にハンガリー文化の名残を感じることがあった。聞くところによると、食文化も受け継がれているとのことだった。このことより、「食」とナショナル・アイデンティティとの関連にも関心が向くようになった。後から知ったことだが、そもそも歴史学において「食」が本格的に研究の対象となったのは20世紀半ばを過ぎてからという比較的最近のことで、まだまだ未開拓の領域が少なからずありそうな印象を受けた。

はたして2020年4月に本学修士課程に入学し、18年ぶりの学生生活が始まったのだが、さっそく大きな壁におち当たることとなった。まず、研究に関連する基本文献をまったくといってよいほど読み込めていなかった。さらに、論文執筆の基本的な作法も心得ていなかった。幸運なことに、入学早々より指導教員の秋山晋吾先生と赤嶺淳先生の両先生から多くの貴重な助言と指導を受ける機会に恵まれた。そのおかげもあってなんとか2年間で修士号を取得し、博士後期課程に進学できたものの、研究者として未熟な点が多々あることを日々痛感している。それでもいつも温かく見守ってくださる両先生には感謝の言葉しかない。

大学院での仲間たちにも感謝している。新型コロナウイルス感染症の流行により、修士課程入学直後からオンライン授業が中心となり、対面でコミュニケーションする機会が限られていた。そんな中でもゼミでは良いつながりができ、博士後期課程進学後は社会学研究科の他の研究分野を専門とする同期たちとも知り合えた。年齢も経歴もさまざまであるだけに、仲間たちとの交流の中では常に新しい刺激を得ている。何より、共に励まし合える存在がとてもありがたい。また、「仲間」と呼んでしまうのは大変恐縮であるが、ハンガリー在住時代に知り合った研究者各氏からは執筆の機会を提供された。そのおかげで研究者としての実績を積むことができたことに深く感謝している。

かつて、とある人生の先輩の方が、「いい研究をするために必要なのは、いいテーマ、いい教師、いい研究仲間、この三つである」と仰っていたのを思い出す。今の自分はそのすべてに恵まれている。あとは自分自身が精一杯邁進することで、意義のある成果を出していくしかないのだ。

執筆

1. 倉金順子, 2023, 「国境をまたぐことになったワイン産地」, 長與進・神原ゆうこ編著『スロヴァキアを知るための64章』明石書店、265-269頁。
2. 倉金順子, 2024, 「書評：マーク・B・タウガー著・戸谷浩訳『農の世界史』(ミネルヴァ書房、2023年)」, 『世界史の眼 No.49 (2024年4月)』世界史研究所、2024年。

研究にも天地返し

辛 承理 一橋大学大学院 社会学研究科 博士後期課程 3年

修士課程から一橋大学大学院へ進学し、博士後期課程3年目となった。自分の研究だけでなく、共同研究にも参加できた2023年度は反省も学びも多い一年だった。このタイミングで一度自分の問題意識が芽生えたときのことを振り返ってみたい。

はじめての調査は学部2年生のときだった。とりあえず色々な調査に行ってみたいとの気持ちで選択したゼミは各自で自由にテーマを設定し、合宿で調査を実施し、調査報告書を提出すればよいところだった。

そこであるお米農家さんと出会った。昭和21(1946)年生まれのAさんは中学校を卒業すると同時に家業である農業に従事し、稲作と大豆、野菜を手がけてきた。彼の幼少期の話を聞くと物心ついた頃から畑を手伝っていて、農繁期には学校も行かずに作業に夢中であったという。収穫した生産物は祖母がリヤカーで販売していたのだが高齢になっていくにつれて、販売もAさんの仕事となった。野菜が積み上げられたリヤカーを引っぱって家々をまわり販売している幼いAさんを町中のみんなが可愛がってくれたそう。全量をリヤカーで販売してきたために、農協や一般的な流通は一度も頼ったことがなかった。やがてAさんが大人になりはじめて市場で流通されている安価な米を知ったとき大変衝撃を受けたという。高度経済成長の時代にはいかに米の値段を安くするかが競い合われていて、どこで生産され、どう作られたものなのかも知らないものが販売されていた。その姿を目にしたときの絶望感は言葉にできない。

Aさんにとって米を作ることは単に農産物を作ることではない、自分が生まれ育った風土と自然と付き合い、生命を守ることであった。そういった信念のもとでAさんは地元の仲間を集めネットワークを作り、産直活動や水田トラスト運動を立ち上げ、今でも続けている熱い、熱い農家さんである。

当初農業問題に全く知識がなかった私が提出した報告書を今になって見返すと恥ずかしさしかない。単純にインタビューで聞いた内容と感想のみが書かれている。しかし、Aさんとの出会いをきっかけに市場、大規模な流通に目を向けない農家や、流通で販路を持つことができない農家のことが知りたくなった。その結果、大学の3年間は都内のあるファーマーズマーケットで働きながらそこへ出店する農家さんたちの話を聞いてきた。この貴重な話を自分はどう活かすことができるか悩んだ結果が大学院への進学だった。ありがた

いことに、今でも学部時代にご縁となった農家さんたちにお世話になりながら研究と調査を進めている。

私が話を聞いてきた農家さんたちの共通点としては慣行農業ではない、有機農法や自然農法という生産方法を実践しているところにあった。そのために修士課程からは日本社会の有機農業をテーマとして研究をおこなってきた。農業と有機農業の勉強を重ねていくにつれてようやくAさんが感じた衝撃の意味や、農家たちが語っていた市場流通の規制・規格制度に関して理解ができるようになった。農家から「本当にもどかしいよね」という言葉をよく聞く。

2000年代から環境保全型農業が政策的に拡大するのに伴い、有機農業は推進すべきものとして位置付けられている。2021年に制定されたみどりの食料システム戦略では2050年までに耕地面積に占める有機農業の取組面積の割合を25%へと拡大していくとの目標も掲げられている。それにもかかわらず、現在でも有機農業は「特殊農法」という位置づけであり既存の流通システムに適合するもののみが有機農産品として認められている。しかし、そこに含まれない農業者たちが存在する。農法は農業者が選ぶものであり、そこにはそれぞれの文脈がある。有機農業を営んでいるにも有機農業と言えない現在の規格制度、自分自身で選択した農業を理解してもらえない状況に対しての言葉が「もどかしさ」であったと思う。

これまでインタビューをするときは必ず農家さんの畑作業を手伝いながら実施してきた。それは忙しい時間を割いて下さった農家さんへの感謝の気持ちと、彼らが一番落ち着く場で話を聞くためだった。しかし唯一、天地返しという畑の表面の土を掘り起こし、下層の土と入れ替える作業のときだけは質問どころかもはやしゃべることもできなかった。畑の一番基礎的な作業でありながら、一番労力のいる作業だった。今年は自分の研究においても天地返しということで、表面的な部分だけでなく下層の部分まで深く手を入れていきたい。

論文

1. 辛承理, 2023, 「幾重もの共同と協働」, 赤嶺淳編, 『クジラのまち 太地を語る——移民、 Gondou、南氷洋』, 英名企画編集, 303-326頁。
2. 湯浅俊介, 辛承理, 赤嶺淳, 2024a, 「韓半島東南部における捕鯨の記録①——韓海に君臨した東洋捕鯨株式会社」, 『一橋社会科学』16: 1-28.
3. 湯浅俊介, 辛承理, 赤嶺淳, 2024b, 「韓半島東南部における捕鯨の記録②——韓国捕鯨の「挫折」と捕鯨政治」, 『一橋社会科学』16: 29-57.

そのほか

【書評】

4. 辛承理, 2023, 「農地を守るの意味——被災地における生活再建の営み：庄司貴俊著『原発災害と生活再建の社会学——なぜ何も作らない農地を手入れするのか』」, 『週刊読書人』3503: 4.

【聞き書き】

5. 辛承理, 2023, 「南氷洋、二五回も出漁してるんですよ 網野俊哉さん」, 赤嶺淳編, 『クジラのまち 太地を語る——移民、ゴンドウ、南氷洋』, 英明企画編集, 28-47頁。
6. 辛承理, 湯浅俊介, 2023, 「もう海しか知らないもん 小貝佳弘さん」, 赤嶺淳編, 『クジラのまち 太地を語る——移民、ゴンドウ、南氷洋』, 英明企画編集, 64-85頁。
7. 鈴木佳苗, 辛承理, 2023, 「あ〜、腹ラーセンや 世古忠子さん」, 赤嶺淳編, 『クジラのまち 太地を語る——移民、ゴンドウ、南氷洋』, 英明企画編集, 106-127頁。

ゆっくり、でも着実に

金 定潤 一橋大学大学院 社会学研究科 博士後期課程

2019年1月のある日、大学院に入る前の私は、いつものように日本語学校の授業を終えて、昼ごはんを食べるため、渋谷の街をうろついていた。その時、チラシを配りながら、新しくオープンした店の宣伝をしている人と目が合った。お店の人は一人でも気軽に焼き肉ができる、日本でも珍しいお店であると話していた。大学院進学を前に、自分の研究について色々考えていた私は、研究の素材になると思い、その店で食事をすることにした。

今でもそうであるが、私の研究の根幹にあるのは、「日本の文化」と称されるものと、その背景となる「日本社会」を深掘りすること、もっと広くいえば、「異国」の文化と社会を探究することである。そのため、日本に住んでいる私にとって、日常生活は研究の素材に富んでいる。言葉や行動、社会のシステムなど、ある国において当たり前である日常のものを、外部の人からの視点で書き直すことに魅力を感じているのである。

その中で、私が特に興味を持っているのは、冒頭でも述べたように、外食において一人で食事をすることである。私は元々一人で行動することが好きで、韓国に住んでいた時から一人で外食をすることも多かった。しかし、韓国には二人前から注文を受けるなど、一人で食事ができない店も多く、一人外食に限界があると感じていた。そして、2014年、語学留学で日本に暮らした際、韓国より一人で外食できる店が多いということに気づいた。また、日本人の友達からも、韓国に一人で旅行に行った時、一人前の食事が頼めない店が多くて困っていたという話を聞くことがあった。韓国でも日本は一人旅行者の天国だと言われることがあり、薄々と知っていたものを、暮らしの中での実感できたのである。

しかし、大事なことは、この素材をどのように研究に組み込むのかである。同じ素材でも見方や調査方法によっては、まったく違う研究になりうるからだ。そこで、修士課程の研究で軸として選んだのが、人々の「考え方」と一人外食の関係であった。一人外食のシステムがなりたつのは、それを支える人々がいるからで、一人外食に対する人々の「考え方」を見ることで、一人外食のシステムが発達した理由を明らかにできると考えた。

ところが、2020年初頭からのコロナの感染拡大によって、対面での調査が難しくなり、韓国への往来もできない状況が続いた。そのため、調査地を日本だけに絞り、文献だけでの研究に切り替えることになった。日本人の「考え方」

に関する従来の研究を軸として、一人外食という現象を照らし合わせようと試みたのである。実際の現状に目をむくことができず、文献だけで論を立てることは限界があり、当初思ったものとは程遠くなったが、それが当時の自分にできる最善であった。

その後、博士課程に進み、修士論文を振り返ってみると、反省点が多く見えた。まず課題として浮上したのは、「考え方」を一元化して捉えてしまったことである。私の研究では、日本人全体に共通する価値観や考え方があることを前提に、「集団主義」と「個人主義」が混在していることを日本人の特徴とした。しかし、日本人といっても、住んでいる地域や育てられた家庭環境などによって様々で、ひとくくりにできないのが現実である。心理学者である高野陽太郎は、著書『日本人論の危険なあやまち——文化ステレオタイプの誘惑と罠』において、実証的な研究を通して「集団主義」と言われる従来の日本人論に異議を唱え、文化のステレオタイプやイメージによる判断の問題点を指摘したが、私はまさにそのようなバイアスに取りつかれていたのである。

また、人々の「考え方」と外食のシステムを結びつけようとする試みも荒いものであった。確かに、最初から一人で食事をする人のニーズに合わせたお店のシステムには、一人外食に対する人々の「考え方」が関係していると予想できる。しかし、外食のシステム全体を通してみると、そのようなお店は多くない。一人でも食事しやすい外食のシステムがあるとしても、それが必ず一人で食事をする人々のニーズを反映してできたものとは考えられない。一人で食事しやすい形で外食のシステムが発展したのではなく、外食のシステムがたまたま一人でも食事しやすい形になっているともいえるのである。

このような課題に悩まされながら、私は今研究を続けている。まだこれといった成果をあげられないままであるが、焦らずにできることを少しずつやっていきたい。まず、頭の中で推測し、論を立てるだけでなく、それを実証できる方法を探すことから始めようと思う。「初心忘れるべからず」というが、研究の素材を探して街をうろついていた、大学院入学前の時のように、積極的に行動したい。一人前の研究者になるための道のりが、決して楽なことではなく、多くの時間と努力を要するものであることは知っている。「Slow but steady」ということわざのように、ゆっくりではあるが、一步一步、着実に積み重ねていけば、いい結果が得られると自分を信じて前に進みたい。

理想と現実のはざままで思い切りあがくために

——『面白くて刺激的な論文のための リサーチ・クエスチョンの作り方と育て方』から考える

根本 雅也 一橋大学大学院社会学研究科 専任講師

本書評は白桃書房ウェブサイト「社会科学研究の持つ力」からの転載です。
<https://topic.hakutou.co.jp/study/archives/653>

はじめに

本書は、論文におけるリサーチ・クエスチョンを設定する際のアプローチの仕方について説明するものである。だが、本書から学ぶことができるのは、望ましいリサーチ・クエスチョンのあり方や方法だけではない。理想的ともいえる方法を論じる中で、著者たちが描くのは、その背後にあるアカデミアの現状であり、研究者を取り巻く現実である。そのような現実を言語化し可視化する本書からは、アカデミアのあり方、あるべき姿についての思考も掻き立てられることになる。

そのため、本書を誰に読んで欲しいのかと問われれば、評者は（評者も含め）比較的キャリアの浅い文系（社会科学系）研究者、任期付ポストの研究者、ポスドク、そして特に博士後期課程に在籍する大学院生、と答えたい。今のアカデミア（学術界）の中で、ポストを求め、生き抜こうとしている人びとである。

評者が本書と出会ったのは、評者がリサーチ・クエスチョンの重要性を再認識し、それをどのように伝えるべきか（教えるべきか）、迷っているときであった。授業や学会活動を通じて大学院生と接する機会が増える中で、リサーチ・クエスチョン、問いの重要性を伝えるようになった。だが、その重要性を説明しても、具体的にリサーチ・クエスチョンをどのように設定できるのかについては、うまく説明ができない。そのようなとき、本書の存在を知った。

目を引いたのは真っ赤な装丁だけではなかった。一つは「面白さ」について強調する姿勢が容易に見てとれたことである。タイトルに「面白くて刺激的な論文のためのリサーチ・クエスチョン」とあり、帯には「なぜ『一流誌』の論文は退屈でつまらないのか？」と記されている。本という媒体に比べて、投稿論文は自らが書く場合でも、あるいは読者（ときには査読者）として読む場合でもなかなか「面白い！」と思えないことが多い。「投稿論文だから仕方がない」と半ば諦めつつも「これで果たして良いのだろうか」と繰り返し自問していた。アカデミアで就職を目指すならば、学会誌・ジャーナルへの論文投稿は、純粹に「書きたい」という思いだけでなく、「書かなければならない」ものでもある。そのような状況の中で、どのように「面白さ」を追求できるのだろうか。

評者を本書に引きつけたもう一つは、訳者・佐藤郁哉氏の実践である。質的調査を実践し、今は教える者として、これまでに佐藤氏の著作にたびたび触れ

てきた。『暴走族のエスノグラフィー』は「なるほど、このような調査研究もありえるのか」と素直に驚き、楽しんだ。つまり評者に「面白さ」を感じさせてくれた研究者が本書を訳しているのだ。そこにはリサーチ・クエスチョンの作り方という単純な「ハウツーもの」ではない、何かしらの意義とメッセージがあるように思われた。

1. ギャップ・スポッティングと問題化

——リサーチ・クエスチョンをつくる二つの方法

本書を要点だけ取り出すならば、それは非常に明快である。イントロダクションにあたる第1章で本書の概要が述べられていることに加え、最後の章となる第8章においても本書の内容がまとめられている。巻末には訳者による解説も付されている。これら三つをざっと読むだけでも、大要を掴むことは可能であろう。それは次のように整理できる。

学術誌に投稿され掲載された論文を調べると、ギャップ・スポッティング的なアプローチでリサーチ・クエスチョンを作成しているものが圧倒的に多い。ギャップ・スポッティング的なアプローチとは「先行研究の中に従来見落とされてきた課題領域」といったギャップ(隙間)を見出し、それを埋めようとするものである(第3章)。しかし、その方法は「既存の理論や先行研究の根底にある前提」を再生産する傾向にあるため、「面白い理論の開発」にはつながりにくい(第4章)。そこで、著者たちが提唱するのは問題化のアプローチであり、それは「先行研究の根底にある前提に挑戦する」ものである(第5章)。

本書の第一の主張であり、読者が本書から学ぶことができる一つは、「面白い」リサーチ・クエスチョンを構築しうる問題化のアプローチであろう。著者たちは、第5章で、ギャップ・スポッティング的な方法に代わるものとして問題化の方法を提唱し、その類型や実践する上でのポイントなどについて説明する。そして、続く第6章では問題化の方法の実際の適用例として、組織におけるアイデンティティ、ジェンダーの実践・滅却実践という二つの研究領域を取り上げる。「先行研究の根底にある前提に挑戦する」問題化の方法を学ぶことは、「面白い」論文を自らの手で世に送り出したいと願う者たちにとって有益であろう。

本書から学ぶもう一つはギャップ・スポッティングの方法について理解することである。これは明らかに本書のねらいと願いと逆ではある。第3章では、社会科学系の4分野(経営学、社会学、心理学、教育学)の代表的なジャーナル10誌を取り上げ、研究者が先行研究との関連でリサーチ・クエスチョンを構築する際の典型的なアプローチを実証的に検討する。そして、典型的なアプローチがギャップ・スポッティングであることを指摘し、その諸類型について説明する。また第7章ではなぜギャップ・スポッティングが隆盛となっているのか、その背景について説明される。ギャップ・スポッティングの方法は、著者たちによれば「面白い」論文を生み出すものではない。しかし、現在のア

カデミアにおいて生き残ろうとするならば、理想だけを追い求めるのではなく、ときに現実に向き合うことも必要であろう。ポストを得られなければ、「面白い」論文を生み出すという理想を追求することすら許されないのだから。

2. アカデミアの理想と現実のはざまに生きること

本書の第7章は現在のアカデミア(学術界)を取り巻く状況——現実——を教えてくれる。「なぜ、面白い理論の構築にとって逆効果でしかないギャップ・スポッティング的なアプローチが支配的になっているのか」という章のタイトルが示唆するように、この章では「なぜ我々は、これだけ多くのそれほど面白くもない、あるいは面白いところなどまったくないどころかむしろ退屈でさえある研究をおこなっているのであろうか」という疑問について、学術界の状況に目を向ける。

上記の状況を作り出している要因の一つとして本書が挙げているのは、さまざまな組織や機関において、研究業績を評価する際に「特定のジャーナリスト」が用いられていることである(p.179)。それにより、研究者は「先行研究の根底にある前提」に挑戦し独創的な知識を生み出すのではなく、「特定のジャーナルに自分の論文が掲載されることの方を優先して全精力を傾ける」ようになる。そのために、ギャップ・スポッティング的な方法を採用する。そうして「ギャップ・スポッティング的なハビトゥス」を身につけた研究者は、今度は査読者として、指導教員として、それを再生産していくことになるだろう。

このような現状に対して、本書は痛烈な(だが悲痛な)批判を加える。

実際、多くの[社会科学系の]分野の研究者が目指しているのは、斬新で挑戦的かつ実践的な意義のある研究を志す真の意味での研究者になることなどではない。彼ら・彼女らはむしろ、できるだけ多くのジャーナル論文を製造することを切望する、それぞれの下位領域におけるギャップ検出作業のスペシャリストになり果てているのである。その人々にとってのアイデンティティの拠り所は、独創的な知識や学術知に対する独自の貢献などではない。むしろ、どれだけの本数の論文をどのジャーナルに掲載できたかという点が主たる関心事項なのである。[中略]つまり研究者は、実際の研究が果たし得る貢献よりも論文の発表媒体に関心を持ち始めてしまうことになるのである。(p.186)

ギャップ・スポッティング的な方法の隆盛は、学術界そのもののあり方が背景にある。上記の批判に表れているのは、ジャーナルに論文を投稿し掲載されることが、自身の研究の成果を発表する〈手段〉ではなく、〈目的〉となってしまっているということだ。「この研究の成果を世に聞きたい」という以上に、「(投稿)論文をジャーナルに掲載したい」という欲望が目の中の課題になってし

まうのである。それは主客転倒であるようにも思える。

投稿論文をめぐる主客転倒は、研究に効率性を要請する。すなわち「できるだけ多くのジャーナル論文を製造することを切望する」研究者にとっては、限られたリソースの中で、最大限の成果（「どれだけの本数の論文をどのジャーナルに掲載できたか」）を目指すようになるだろう。研究の「コスパ」「タイパ」が関心事項となるのかもしれない。しかし、少なからぬ社会科学の研究者たちは、こうした効率性を追求する社会のありようを批判的に検討してきたのではなかったのか。にもかかわらず、いまや効率性という規範が自分たちの生きる学術界すら覆いつつあるように感じられる。

本書はアカデミアの現実を知らせてくれる。それはその世界で生きていこうとする大学院生や若手研究者にとって決して輝かしいものではない。しかし、自分たちの置かれている世界を言語化し可視化してくれることには意義がある。それは単に自分たちが置かれている状況を理解する助けとなるからだけではない。それは、現在のアカデミアのあり方が必ずしも自明ではないこと——唯一絶対であるわけでも最善であるわけでもないこと——も教えてくれるからである。それはいかに強力で、簡単には覆らないものであったとしても、変わらないわけではない。そして何より著者たち（そして本書を日本に紹介する訳者）のように「面白さ」を大事にする人びとがいる。このように考えるならば、本書は、アカデミアの現状を知らせるのみならず、学問のあり方、あるべき姿について再考を促しているようにも思われる。

現在のアカデミアで「面白さ」という理想だけを追求することは容易ではない。だが、現実だけを見据えては、何のために研究をしているのかが見えにくくなる。アカデミアの理想と現実のはざままでどう生きるのか。そのような問いを本書は読者に投げかけているように思う。

以上は評者が本書を読んで考えたことである。他の研究者は異なる見解を持つかもしれない。このことは、本書が議論の触媒となる可能性を持つことを示唆する。つまり、本書は、本書をもとに自分たちの置かれている状況やアカデミアのあり方について議論する素材となりうるということだ。たとえば、大学院生や若手研究者のワークショップや研究会などにおいて本書を取り上げてみてはどうだろうか。本書を読み、感じ、考えたことを共有することは、自分たちの取り巻く世界をさらに可視化し、解像度を上げることにつながるように思う。そして、おそらくは、その中で学問の持つ「面白さ」もまた再確認されるのではないだろうか。要は、理想と現実のはざままでどのように生きるのかについて、一人で考えるのではなく、仲間とともに考えるということである。

3. 「面白い」研究を目指して——質的調査の可能性

そもそも「面白い」論文・研究とは何であろうか。本書の第4章は、理論の「面白さ」とは何かについて論じている。通常、「面白さ」とは個々人によって異なるものだ。しかし、著者たちによれば、「面白さ」とは「決して個人的な意

見だけに左右されるような問題」ではなく、「一般的な性格」を有する(p.72)。それは、「その理論が何らかの重要な点で既存の理論の根底にある前提に対して挑戦を突きつけている」ことであり、「面白さ」を感じるのは「紛れもなく自明の事実のように見えることが実際には事実ではない」と知るときなのである。つまり、私たちが自明視していたもの(それはその個人や集団によって変わりうるものだが)を否定すること／されることが「面白さ」の重要な要素だといえよう⁽¹⁾。

「面白い」論文を作成するための方法として、著者たちは問題化のアプローチのほかに、もう一つの方法に言及している(第8章)。著者たちはデータ、経験的資料(empirical material)の活用に注目する。経験的資料には、「既存の前提を再生産して強化する傾向」がある一方で、「常にある程度は、理論的枠組みの一部および研究全体の根底にある前提の枠組みの前提とは矛盾するような側面が含まれている」(pp.223-224)。そこで、著者たちが提案するのは、謎(ミステリー)を作り上げ、それを解明するという謎解きの方法論である。ここでの「謎」とは「予想を裏切り、研究者を(一時的な)当惑と方向感覚の喪失の段階へと導く経験的知見」(pp.224-225)であり、「それを解いていくためには、確立された前提や常識の枠組みからはみ出した一連の新しいアイデアが必要になってくる」(p.225)。

謎を含んだ経験的資料に出会えるのはどこか。質的調査を実践し、教える者として、その答えの一つは〈フィールド〉だと訴えたい。謎解きの方法は、フィールドワークやインタビューといった質的調査と親和性を持つ。たとえば、社会調査論や調査史に関して多くの著作を持つ川合隆男は次のように記している。

私たちの関わる社会的現実には、固定したものではなく、絶えず動態的で創発的で柔軟で多様なものであり、固定した限定された観念や枠組み、単なる対処では把握し得ない。そこではフィールド・ワーク、フィールド・リサーチを倦まず絶ゆまず(ママ)(楽しく)試みることが求められる。人々の生きるフィールドでの探究、それは人間そのもの、泣き声と笑い声、語らいと沈黙、仕事場、遊び、教室、雑踏、道端、祭り、野原、天空、慣習、役所、老い、結婚、家族、暮らし、仕事場(ママ)、産業、生と死、戦い、病、医療、介護、災害、夢、など人間が果てしなく関わり繰り広げる人間関係の諸状況に自らをおき、これまで身につけた所与・前提的なものを相対化して自らの体と五感で自らの情感・体験・観察・着想・判断などを確かめ直していく作業である。既成の通念や知識を相対化して、自らの野生の情念や知を育てていく試みである。(川合 1999, p.229)

フィールドに出かけ、そこで調査を行うことは、多くの出会いを経験することになる。そうした出会いは、しばしば自分が身につけていた前提や常識に留保を投げかけ、ときに壊す。それにより、先行研究が自明視していた前提を問題化することもある。評者もまたそのような出会いを経験しているが、自身の

経験をもとに論じることは別稿に譲り、ここでは、質的調査が「面白い」論文や研究へとつながる問題化や謎解きのアプローチとの親和性を持つこと、それゆえに「面白い」論文・研究を生み出す可能性を多分に有していることを指摘するにとどめておきたい。

おわりに

本書は一見「ハウツーもの」である。しかし、それだけではないし、それだけにしてはいけない、と感じる。というのも、その内容を考えれば考えるほど、本書が学知を対象とした調査研究の成果であることが分かってくるからである。アカデミアの現実はどのようなものか。理想はどうあるべきか。そして、そうした現実と理想のはざまで生きざるをえないのだとすれば、その中でどのようにあがくことができるのか。そうした問いについてあらためて考えさせてくれた本書に感謝したい。

[註]

- (1) Davisによる「面白さ」の指標が、本書 p.237の「付録」として掲載されている。これらに目を通すと、「一見～のようにみえるものが、実は…である」という形式になっている。評者は、以前、論文の「面白さ」について「意外性」と指摘したことがある(JOHA 編集委員会 2021, pp.219-221)。

[参考文献]

- JOHA 編集委員会 (2021) 「JOHA 編集委員会主催ワークショップ『良い論文』を書く」『日本オーラル・ヒストリー研究』第17巻, pp. 213-229.
- 川合隆男 (1999) 「訳者 あとがき」シャッツマン, L., ストラウス, AL. 『フィールド・リサーチ——現地調査の方法と調査者の戦略』慶應義塾大学出版会, pp. 225-234.

2023年度の研究の軌跡

調査

赤嶺淳

海外調査

○ノルウェー (Tromsø, Bergen)、アイスランド (Reykjavík, Húsavík)、6月。ベルゲン大学 (University of Bergen) では大豆のグローバルヒストリーを研究する Ines Prodöhl さんの知己を得るとともに、同大学で日本研究を講じる Nathan Edwin Hopson さんを知ることになった。今後、イネスとは油脂研究、ネイサンとは三陸地方における沿岸捕鯨の発達史についての共同研究をおこなう計画である。ノルウェー経済大学 (NHH: Norwegian School of Economics) で捕鯨業の経済史的な位置づけを研究する Bjørn Lorens Basberg さんを訪ね、かねがね抱えてきた質問について指導いただいた。また、Basberg さんの紹介で、Tønnessen & Johnsen [1982] (*The History of Modern Whaling*) のノルウェー語版全4巻を入手することができた (本代と郵送料がほぼ同額という事実には不思議な気持ちになった)。英抄訳版で省かれている注や参考文献を活用していきたい。はじめて訪れたアイスランドでは、アイスランド大学 (Universitas Islandiae) の Kristín Ingvarsdóttir さん (アイスランド—日本関係史研究) の案内でレイキャヴィーク周辺の捕鯨関連施設を訪問するとともに、フーサヴィーク鯨類博物館 (Húsavík Whale Museum) で開催された第8回鯨類学会において、“Resumption of Japanese commercial whaling and recent trends in whale meat foodways in Japan” と題した発表をおこなった。

○カナダ (Vancouver, BC)、U.S.A (Eugene, OR)、10月。旧知の Michael Hathaway (Simon Fraser University) さんと Ryan Jones (Oregon University) さんを訪ね、北西海岸における鯨類をふくむ海獣利用史についての資料収集をおこなうとともに、将来的な共同研究の構想を語りあった。オレゴン州立大学 (Oregon State University) の Hatfield Marine Science Center において、分子生態学 (molecular ecology) 研究と保全遺伝学 (conservation genetics) 研究の世界的権威で捕鯨に批判的な Scott Baker さんの司会のもと “Five years past since the resumption of commercial whaling in Japan: Report of an expedition by Nisshinmaru” と題した講演をおこなった。当然ながら、聴衆も米国的な海洋生物学者ということで緊張したが、「他流試合」の必要性を実感する機会となった。

国内調査

○下関。新造船観鯨丸の進水式 (8月29日)、日新丸の帰港・引退セレモニー (11月4日)、観鯨丸の竣工式 (入魂式、3月29日) に参列した。

○長崎。おくんち (長崎くんち祭り) において10年ぶりの奉納となった「脊美鯨の

汐吹」を見学することができた。古式捕鯨の文化遺産を継承するとともに白手物を中心とする鯨食文化の旺盛な様子の意味を考えさせられる機会となった(10月)。

松浦海翔

- 秋田県北秋田市(4月3日～7月3日、10月18日～11月17日)：参与観察、インタビュー調査などを実施。クマ猟や山菜採取、有害駆除、クマの解体作業、集落行事などに参加。
- 山形県西置賜郡小国町(5月4日)：小国マタギの方々が主催する、「第41回 熊まつり」への参加。
- 福島県只見町(6月24・25日)：「第34回 ブナ林と狩人の会 マタギサミット in ただみ」への参加。
- 新潟県村上市大毎(11月7日)：村上市で狩猟をおこなう方への聞き取り調査の実施と、山熊田への訪問。

2023年度の研究の軌跡

研究成果

赤嶺淳

論文

1. 湯浅俊介, 辛承理, 赤嶺淳, 2024a, 「韓半島東南部における捕鯨の記録①——韓海に君臨した東洋捕鯨株式会社」, 『一橋社会科学』16: 1–28.
2. 湯浅俊介, 辛承理, 赤嶺淳, 2024b, 「韓半島東南部における捕鯨の記録②——韓国捕鯨の「挫折」と捕鯨政治」, 『一橋社会科学』16: 29–57.
3. Akamine, J. 2023. “The McDonaldization of the sea cucumber: Changes in foodways of an ancient delicacy in Northeastern Asia.” In Annie Mercier, Jean-François Hamel, Chris Pearce, and Andy Suhrbier eds., *The World of Sea Cucumbers: Challenges, Advances and Innovations*. Cambridge, MA: Academic Press, pp. 51-63.
4. 赤嶺淳, 2023, 「すれちがうまなざし——個人史とグローバルヒストリーの交差点で」, 赤嶺淳編, 『クジラのまち 太地を語る——移民、ゴンドウ、南氷洋』, 英明企画編集, 203–252頁。

そのほか

5. 赤嶺淳, 2024a, 「太平洋のフロンティア世界を生きる——サンゴ礁のマルチな漁法」, 人文研ブックレット 81 (『東南アジアの山の民・海の民・街の民——小規模生産者たちがつくる経済と社会 第107回公開講演会』): 29–55.
6. 赤嶺淳, 2024b, 「ナマコを想う(その2)」, 『GGT ニュースレター』126: 1–3.
7. 赤嶺淳, 2023a, 「ナマコを想う(その1)」, 『GGT ニュースレター』125: 1–4.
8. 赤嶺淳, 2023b, 「日新丸から関鯨丸へ——母船式捕鯨業のあらたな挑戦に贈る」, 共同船舶株式会社監修, 『捕鯨に生きる』, 108–111頁。

金定潤

1. 金定潤・赤嶺淳, 2023, 「舌は覚えているからね 久世滋子さん」, 赤嶺淳編, 『クジラのまち 太地を語る——移民、ゴンドウ、南氷洋』, 英明企画編集, 128–153頁。
2. 松浦海翔・金定潤, 「足下は油まみれ 山下憲一さん」, 赤嶺淳編, 『クジラのまち 太地を語る——移民、ゴンドウ、南氷洋』, 英明企画編集, 88–105頁。

倉金順子

1. 倉金順子, 2023, 「国境をまたぐことになったワイン産地」, 長與進・神原ゆうこ編著, 『スロヴァキアを知るための64章』, 明石書店, 265–269頁。
2. 倉金順子, 2024, 「書評: マーク・B・タウガー著・戸谷浩訳『農の世界史』(ミネルヴァ書房、2023年)」, 『世界史の眼』No. 49, 世界史研究所。

辛承理

1. 辛承理, 2023a, 「幾重もの共同と協働」, 赤嶺淳編, 『クジラのまち 太地を語る——移民、 Gondou、南氷洋』, 英明企画編集, 303-326頁。
2. 辛承理, 2023c, 「農地を守ることの意味——被災地における生活再建の営み：庄司貴俊著『原発災害と生活再建の社会学——なぜ何も作らない農地を手入れするのか』」, 『週刊読書人』3503: 4.
3. 辛承理, 2023c, 「南氷洋、二五回も出漁してるんですよ 網野俊哉さん」, 赤嶺淳編, 『クジラのまち 太地を語る——移民、Gondou、南氷洋』, 英明企画編集, 28-47頁。
4. 辛承理・湯浅俊介, 2023, 「もう海しか知らないもん 小貝佳弘さん」, 赤嶺淳編, 『クジラのまち 太地を語る——移民、Gondou、南氷洋』, 英明企画編集, 64-85頁。
5. 湯浅俊介・辛承理・赤嶺淳, 2024a, 「韓半島東南部における捕鯨の記録①——韓海に君臨した東洋捕鯨株式会社」, 『一橋社会科学』16: 1-28.
6. 湯浅俊介・辛承理・赤嶺淳, 2024b, 「韓半島東南部における捕鯨の記録②——韓国捕鯨の「挫折」と捕鯨政治」, 『一橋社会科学』16: 29-57.
7. 鈴木佳苗・辛承理, 2023, 「あ〜、腹ラーセンや 世古忠子さん」, 赤嶺淳編, 『クジラのまち 太地を語る——移民、Gondou、南氷洋』, 英明企画編集, 106-127頁。

鈴木佳苗

1. 鈴木佳苗・辛承理, 2023, 「あ〜、腹ラーセンや 世古忠子さん」, 赤嶺淳編, 『クジラのまち 太地を語る——移民、Gondou、南氷洋』, 英明企画編集, 106-127頁。

松浦海翔

1. 松浦海翔, 「大変な仕事やでえ 濱田明也さん」, 赤嶺淳編, 『クジラのまち 太地を語る——移民、Gondou、南氷洋』, 英明企画編集, 48-63頁。
2. 松浦海翔・金定潤, 「足下は油まみれ 山下憲一さん」, 赤嶺淳編, 『クジラのまち 太地を語る——移民、Gondou、南氷洋』, 英明企画編集, 88-105頁。

面白い研究って？

ようやく創刊にこぎつけました。

2024年3月のことでした。坂梨健太さんから頂戴した『農学原論 News Letter』20号を眺めていたときのことです。「こんな雑誌をつくりたい」という思いがつのったのです。

同誌は坂梨さんが所属する京都大学大学院農学研究科生物資源経済学専攻農学原論分野が発行する年報です。教員であろうと院生であろうと、研究員であろうと誰であろうと、同分野の所属者全員に課せられた自己評価の場です。

わたしの所属する研究科にも分野はあるとはいえ、京都大学のような講座制とは異なり、ゆるやかなまとまりにすぎません。しかも雑誌をだすにはいたらない小さな単位です。今回、『きわ』の創刊に賛同してくれたのは、分野を超えてあつまってくれた若い同僚たちです。昨今の大学と学界を支配する閉塞感をうれい、「研究の面白さを言語化すべきではないか？」と議論しあったことを契機としています。ありがたいことに発起人3名で申請した科研費の挑戦的研究(萌芽)が採択され、こうしてウェブジャーナルとして刊行することができました。

記念すべき創刊号たる今号には、エッセイに自己評価、書評が寄せられました。本誌が「きわ」を楽しむための媒体であることは、創刊の辞でも言及したとおりです。分野、調査地、手法、文体、還元スタイルなどを問わず、ひろく「面白い研究とは何か?」、「何故、面白いのか?」を追求していきたい同志と歩んでまいり所存です。

ヨチヨチ歩きの『きわ』をあたたかく見守っていただければ、と存じます。

2024年7月

発起人代表 赤嶺 淳